

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市芸術文化協会	
施 設 名	京都芸術センター	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	3,735	(千円)
公 演 事 業	3,735	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	0	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	KACPAP2019/Contemporary Dance 相模友士郎 「エイリアンズ」	11/29, 30, 12/1	出演：白井剛、佐藤健太郎 振付・演出：相模友士郎	目標値	150
		京都芸術センター 講堂		実績値	91
	KACPAP2019/Contemporary Dance Manuel Rodreges 「Body on Paper」	11/8, 9	出演：Manuel Rodreges	目標値	150
		京都芸術センター 講堂		実績値	106
2	KAC PAP 2019/Music 北爪裕道 「粒子の踊り」	2/29, 3/1 *規模縮小	出演：本堂誠、石田湧次 作曲：北爪裕道	目標値	160
		京都芸術センター フリースペース		実績値	27 縮小
	KAC PAP 2019/Music 坂東祐大 「感情の作られ方」	3/28, 29 *2021年に延期	出演：Ensemble FOVE 作曲：坂東祐大	目標値	160
		京都芸術センター 講堂		実績値	0 中止
3	KAC PAP 2019/Traditional Performance 「継ぐこと・伝えること 金剛流を魅せる」	2020/3/15 *中止	出演：金剛龍謹ほか ゲスト：渡辺美帆子	目標値	105
		京都芸術センター 講堂		実績値	0 中止
	KAC PAP 2019/Traditional Performance 「継ぐこと・伝えること 井上流を魅せる」	2020/3/20 *中止	出演：井上安寿子ほか ゲスト：きたまり	目標値	105
		京都芸術センター 講堂		実績値	0 中止
4	ニュイ・ブランシュ 2019 テオ・カシアーニ 「LECTURE (02)」	10/5	構成・演出：テオ・カシアーニ サウンド：小松千倫 リーディング：クレオ・ベルス トルペン、竹ノ内芙美	目標値	80
		京都芸術センター フリースペース		実績値	74
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>◆京都芸術センターのミッション・事業ビジョン</p> <p>①芸術家の制作・発表活動を支援する。 ②芸術文化の情報のハブとして機能する。 ③さまざまな芸術ジャンルの融合だけでなく、芸術や学問や産業が交差する場とする。また、芸術家同士が刺激しあい、芸術創造を通して、多様な出会いと交流を可能にする。</p> <p>これら3つの柱を同時に機能させることで自由で活発な芸術交流の拠点として活動していくことを社会的役割としている。専門家と設立当初に作成した運営趣意書とは別に、現場で事業を担当するスタッフ間で話しあい、ミッションを受けて、①自由であること ②多様であること ③実験的であること・新しいことに積極的に取り組むこと の3点を、事業を企画し実施のうえで念頭においた。結果、既定の座席概念を崩すような新しい空間構成やアーティストが今試したい内容や企画が実現できたと考えている。</p>
<p>◆変更点</p> <p>要望書からの変更点としては、新型コロナウイルスの影響を受け、2月末に開催を予定していた1事業(KAC PAP Music1 公演)を関係者への公開として規模縮小して実施したほか、3月に開催を予定していた3事業(KAC PAP Music1 公演、「継ぐこと・伝えること」2公演)を中止・次年度へ延期とした。他事業については、交付申請書に変わりなく実施を行った。どの事業も、施設側で先に開催可否を判断するのではなく、依頼していたアーティストと状況を共有し相談する過程をもち、その判断を行った。他の事業に関しては、予定通り実施した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>京都芸術センターでは事業に関係したアーティスト、団体に一年間の活動状況を調査するためのアンケートへ協力を依頼しそれらを分析することで事業へと反映させている。(アンケート実施：2020年4月1日～21日、回答数：47件、回収率32% *新型コロナウイルスによる閉館時と重なった為、回答数減少がみられた)</p>
<p>◆芸術家の制作・発表活動状況</p> <p>アーティストの「創作・発表活動状況」を検証したところ、95%が継続していると回答しており、2019年4月から2020年3月の活動の発表頻度を聞いたところ、63%が「変わらない・増えた」と回答。</p>
<p>◆一年間の変化、受賞歴等の成果</p> <p>60%が、一年間に一定の成果をあげたと回答し、多岐にわたる受賞や各地（海外含む）への招へいが挙げられた。「活動について*自由記述」では、「センターで行った公演をベースに、尼崎と広島県にて発展的な公演とすることができた」「センターで演出した作品をみた俳優から、一人芝居の演出が依頼された」などが挙がり、次の活動へと繋がっている様子がうかがえた。</p> <p>「要望*自由記述」において、「現況下においても、可能な限り創作拠点として一日でも早く機能してほしい」「様々な芸能の人たちが集まる場、自由討論みたいな場をつくってほしい」などが挙げられた。アンケートより、4月初旬の新型コロナウイルスの影響下においても、アーティストが継続して活動を実施できていること、また一定の成果をあげていることがわかった。施設としては、独自でソーシャルディスタンスのガイドライン作成を行い、5月20日から創作の場である制作室の再開へ動いたことで、文化的にも経済的にも少しでも活動が続けられるように支援する姿勢を行動で示すことができた。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

◆目標

観客・地域住民—鑑賞や参加を通して、芸術への関心や理解が高まる、地域への愛着が深まる、心豊かな生活へ繋がる、等の変化

芸術家—創作や発表を通して、新たな気づきや刺激を受ける、スキルアップの場となる、新たなネットワークができる、新たな観客の獲得、等の変化

◆指標設定及び測定方法

指標：観客・地域住民—芸術センターに登録しているボランティアスタッフ約300名を代表として設定
芸術家—京都芸術センターで事業を実施または創作している芸術家

測定方法：観客・地域住民—観客アンケート、ヒアリング（実施予定であったが、新型コロナウイルス感染防止のため4月7日より休館となった為、ヒアリング未実施。開館後行う予定）
芸術家—アンケート調査（実施：2020年4月1日～21日 回答数：47件 回収率32%）

◆指標設定根拠となる統計及びデータ *芸術家のみ：アンケート

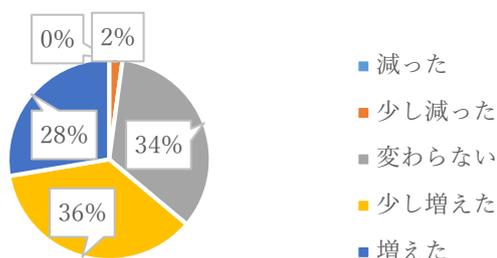
Q4. この1年間（2019年4月から2020年3月）の活動で発表の頻度は以前に比べてどうか？

Q5：この1年間（2019年4月から2020年3月）の活動で、発表の場所は、以前と比べ変化しましたか？

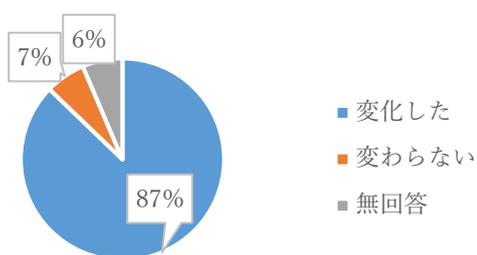
Q12. 現在、困難に感じていることがあれば教えてください*自由記述

◆目標が達成されたことがわかるデータ *芸術家のみ

Q4：この1年間の活動での発表の頻度の変化



Q5：この1年間の活動での発表の場所の変化



◆目標に対する調査の分析内容

上記アンケートより、事業後に活動やその規模にどのような変化があったかを測定した。34%のアーティストがここ一年間活動を継続でき、64%のアーティストに発表頻度の増加がみえる。また87%のアーティストの発表場所に変化があらわれており、自由記述欄に「国外での仕事が増えた」「形態が違う劇場での作品発表ができた」「海外も含め多地域に広がり、小劇場のみならず文化会館の中ホールも回るようになった」「東京で大きなプロジェクトが始まり東京での活動が増えた」などが挙げられ、規模が縮小したという声は挙げられなかった。約8割強が拡大している傾向がみられ、スキルアップの場として機能したのではないかと考えている。

また、Q8の現在困難を感じている点に関しては、「新型コロナウイルスによる経済難」「創作ができない」などが挙げられたが、他に「芸術に理解ある方のサポート」「制作プロセスそのものについてのアーティストインタビューなどの媒体」「他分野との交流を深めるプラットフォーム」などを求める声があった。それらを受けて、今後、事業後にも「新たなネットワーク」へと繋がるような関係性を継続し支援するシステムの検討を模索したい。

観客は、KAC PAP Danceのアンケートによると、公演に不満と答えた人はおらず92%が満足と回答した。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

新型コロナウイルスの影響で、開催できた事業が 1. ダンス、4. ニュイ・ブランシュのみであったので、主にその二事業より、以下を測定する。

◆事業期間と計画性

・計画当初の事業期間

KACPAP2019/Contemporary Dance 相模友士郎「エイリアンズ」はほぼ計画通りのスケジュールで進んだ。KACPAP2019/Contemporary Dance Manuel Rodrigues「Body on Paper」に関しては、作品がアーティストのなかで定まるまで、現場でスタッフやテクニカルスタッフとかなりの時間をかけてやり取りを行った。また作品創作も、Manuel Rodrigues 本人のみなので、一つ一つの決定に慎重に十分な時間をかけて行ったため、計画当初にくらべると、作業的には遅れる形となった。また京都芸術センターは、広報担当者が別でいる訳ではなく、事業担当者が広報も担っているため、アーティストとの作品創作に時間をかけるあまり、十分に広報できなかった点は、どの事業にも共通する課題として捉えている。

ニュイ・ブランシュ 2019 テオ・カシアーニ「LECTURE (02)」は、計画通りに進んだ。

・収支予算

―想定入場者数の根拠

―戦略（販売計画、広報計画、属性把握、料金設定の増加策や削減策など）

KACPAP2019/Contemporary Dance 相模友士郎「エイリアンズ」および Manuel Rodrigues「Body on Paper」に関しては、申請段階では京都芸術センターの一般的な配席の席数で見込んでいたが、双方とも空間構成を重視する作品であったため、相模友士郎「エイリアンズ」に関しては1ステージの席数を約1/3にしステージ数を増やすことで対応した。また Manuel Rodrigues「Body on Paper」に関しては、アクティングエリアが想定以上に広がったため、約1/2の席数となった。相模友士郎「エイリアンズ」は観客も作品に参画する作品であったため、1ステージの鑑賞者数が限定された。ステージ数を増やすことも検討したが、その分支出もかかるため、5ステージにとどまった。公演が始まってから評判が広がり、最終日は内部関係者の鑑賞を断るほどになっていたため、追加予算があればあと2、3ステージ増やしても良いほどの反響であった。

ニュイ・ブランシュ 2019 テオ・カシアーニ「LECTURE (02)」に関しては、無料開催のため変更なし。

◆予算面での適切性、事業費が適切か、大きく予算が変更した点

KACPAP2019/Contemporary Dance に関しては2公演とも、想定していた客席数が確保できないことがわかった時点で支出の見直しも行ったため、大きく変更することなく開催することができた。

ニュイ・ブランシュ 2019 テオ・カシアーニ「LECTURE (02)」に関しては、要望時からプログラム内容が変更になった際、すぐに変更届の提出を行った。「ニュイ・ブランシュ」は京都市内各所で行われるプログラムのため、全体を鑑みた際に、他所で扱っていない、文学と音楽のコラボレーションによる公演が最適であると、関連機関とともに判断したためである。予算面での大きな変更はない。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

◆京都芸術センターの資源

京都芸術センターは、貸館運営を行わない、若手芸術家の創作支援に重点を置いた施設である。そのため、芸術家のあらゆる創作を可能にすること、また作品を広く発信することに重点をおいている。資源は、アーティストの創作活動の場を確保することであり、その作品を通してアーティストはもちろん、鑑賞者に新たな気づきや芸術への深化などの変化をもたらすことが当施設の役割だと考えている。

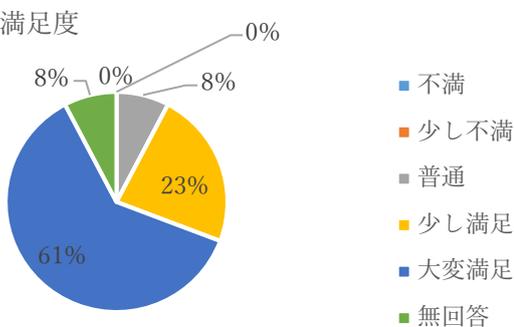
それらを可能にしていくために、事業スタッフであるアートコーディネーター、プログラムディレクターがフラットな立場で企画提案を行い、皆の意見を反映させながら企画を練るなど、企画段階でのプロセスを重視している。現場の事業スタッフの意見を積極的に取り入れることで、同時にあらゆる創作に対応できる人材育成を行っている。施設をでた後もアーティストの創作を力強く支援していく人材をつくることで、広い視野をもって京都芸術センターが掲げるミッションを成し遂げていきたい。プログラムの創造性に関する評価については、観客アンケート、アーティストアンケートより測定する。

◆事業実施後：観客の変化（公演後の観客アンケートより）*回答率 8.6%

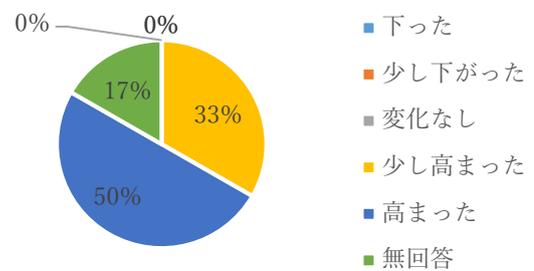
観客に事業の満足度、その後の関心、作品にかかわった芸術家の将来性などを聞いた。

事業への不満はなく、84%が満足している。また芸術への関心は、83%の人が「少し高まった」「高まった」と答えている。また作品にかかわった芸術家等の将来性や可能性については、同じく83%が作品鑑賞をとおして芸術家の将来性や可能性を感じていることがわかった。アンケートの回収率をあげることでより多くの鑑賞者の意見を次の企画に反映させていきたいと考えている。

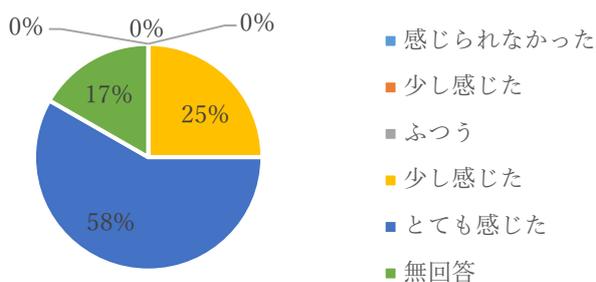
Q1.事業の満足度



Q2.事業鑑賞後の芸術への関心



Q3.作品にかかわった芸術家等に将来性や可能性を感じたか



自己評価

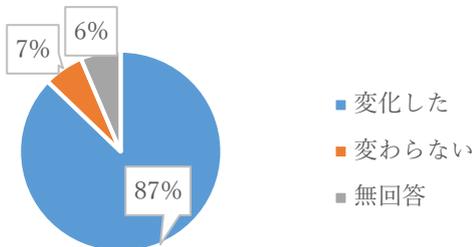
地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

◆事業実施後：芸術家の変化（アーティストアンケート）

Q6：1年間（2019年4月から2020年3月）の活動で、受賞やレジデンス等の成果があれば教えてください。

事業後 87%がなんらか変化していると答え、記述欄に、他地域や国でのプロジェクトや招へいをあげた。あがっている施設をみていると、京都芸術センター規模で事業実施したことで、実施以前に比べ、規模が同等、またはそれ以上に拡大していることがわかった。また、海外でのフェスティバルやプロジェクトに招へいされているケースもあり、広がりを感じる事ができた。

Q5：この1年間の活動での発表の場所の変化



上記より、芸術家にとって、次の展開へと繋げる役割は一定、果たせていると考えている。

◆事業実施後：担当スタッフの変化（ヒアリング）

以下、当施設で事業を担当するスタッフの声をあげる。

- ・新作のためのリサーチにアーティストと協働できたことで、作品がどのように生まれてくるか、そのプロセスにとっても興味をもった。またリサーチに同行したことで、担当者としてその作品に愛着がめばえ、また同時に新しい作品をつくることの難しさも知った。そのアーティストが別場所で行う作品をまた観にいこうと思う。
- ・海外からきたアーティストは滞在中にある程度短期間に収集して作品づくりあげることになる。どう思う？とアーティストから意見を求められることが多く、テクニカルスタッフにも協力してもらい、自身の意見や提案を伝えながら作品をつくっていった。この施設らしい、やり取りだと思うので大切にしたいと思っている。
- ・課題としては、リサーチやクリエイションにつくと、作品にとってはよくなると思うが、やるべき目の前の作業や仕事も多く、なかなか時間を十分に割けないことが難しい点でもあった。
- ・指定管理料や補助金が、1年単位のもので、長い間かけてクリエイションしていく類のものは誕生しづらい。またその成果を長い間かけて見る、判断するという作業が、目の前の作業に追われて後回しとなっている。

◆観客、芸術家、スタッフ変化を通じたまとめ

事業後の成果としては、鑑賞者、芸術家とある一定は効果があったことがみえた。また、創作に係るスタッフも必要な作業であると感じており、今後も芸術家の創作環境を重視したプログラムは立てていきたい。

一方で、課題としてあがった、成果をどれくらいの期間でどのようにみるかという点である。本補助金もそうであるが、助成はプログラム実施に付随してくるものである。そのため、目の前の事業を実施する作業が、大きなウェイトを占める。スタッフ及びアーティストと話していたことだが、本来は10年ないし20年間をどう振り返るか、なにを成果とするかは、事業でいうとフェスティバルに値するくらいの作業量となる。それに集中できるように、例えば周年事業を迎える施設には、フィードバックのための予算を得る機会、そういった支援があるなど、何か制度として工夫があると有り難い。特に当施設は事業分析に対し客観的視点を必要としているが、外部に分析を依頼するほどの予算はない。目の前の仕事を優先し事業分析が後回しになっている（スタッフ数的にもならざるを得ない）現状なので、これを事業として位置づけ、本格的に行うような形態を望んでいる。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

事業終了後も、持続的に発展することができる施設として、組織構成、強化、維持のための取組を行っているかについて考察するために、以下に項目ごとに振り返った。

◆人材面

ー担当分野

京都芸術センターの事業は、主担当（AC）、副担当（AC）そして統括する担当（PD）で構成している。事業にもよるが、チームで分担しながら事業の実施だけでなく、広報、予算管理といった経理面も行っている。専属の広報担当者がいないので、広く発信していくことがなかなか叶わないが、その事業を一番理解している担当者が発信することで、意味ある広報にはなっていると感じている。が、広報が弱いという点は長年の課題である。

ースタッフのその後のキャリア

事業を担当するアートコーディネーター（AC）は最大三年間の雇用となる。事業は決まったものを分担する形ではなく、企画立案から共に行うため、3年の間にある程度企画ができ、創作作品にも立ち会える人材を養成している。そのため、毎年、他地域の他国の劇場や施設と幅広く活躍する様子が見える。

就職状況）滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、せんだいメディアテーク、山口情報芸術センター、ロームシアター京都、京都府立文化博物館、青森県立美術館、せんだい演劇工房 10-box 他

ー業務に係る研修制度

2017年度より、スタッフが外部での催しや会議、研修に参加する際は、組織内で申請すると、研修とする制度を実施している。研修は、スタッフが担当する事業や本人のスキルによって必要となる内容が異なるため、希望制にしている。また内部に講師を呼ぶのではなく、積極的に外部への研修を推奨している。

ーボランティア組織

当施設の事業をサポートするボランティアが300名ほど登録している。地域住民の方も多く、事業を理解したうえで、協力をサポートしてくれている。プロジェクトの運営や展覧会の監視、図書室運営など活動は幅広い。

ー上記より人材面の課題

比較的、施設ミッションに対して柔軟に動ける人材体制を敷いている。また今年5月に「組織診断シート」を作成し、内部でまずはどのように振り返るか、どういった組織としていくかを分析結果と共にスタッフ皆で検討する予定。それとは別に、近年、作品創作において複雑な著作や権利関係が絡むものも増えてきている。また契約書類などは、設立当初作成したものを使用しているため、現況にふさわしい形で作成し直したい。その際に必要となる弁護士など外部専門家やアドバイザーとの連携を、今後は進めていきたいと考えている。ただし、ここは予算に絡む部分であるので、必要性を感じながらも、長年希望し続ける状態が続いている。

◆経営面

収支推移としては、ここ3年間で大きな変化はない。資金調達方法としては、他施設や京都市などからの受託事業を受入れる、また事業ごとに補助金なども積極的に申請しており、事業実施の面での予算は確保できていると考えている。ただし、この振り返りを通して、課題としてあげた<事業分析><広報面><法律や経営に伴う外部専門家との連携>に関しては、長年課題としてあげているが着手できていない。新たな案として今、検討しているのが、クラウドファンディングや寄付行為などであるが、もう少し本格的に施設ミッションにあわせた形で位置付けられる内容を検討し続けている。